

坐薬について

今回は坐薬についてです。坐薬は経口摂取ができない患者にも、比較的簡便に使用できる薬です。当院で採用されている薬の種類と、特徴について記載していきます。

販売名	主成分	効果	基剤の性質	基剤	溶融点
アンヒバ	アセトアミノフェン	解熱・鎮痛	油脂性	ハードファット	33.0~35.5℃
ジクロフェナクナトリウム「日医工」	ジクロフェナクナトリウム	解熱・鎮痛・消炎		ハードファット	33.5~35.5℃
ワコピタール	フェノバルピタール	催眠・鎮静・けいれん		ウイテプゾールH-15	33.5~37℃
ナウゼリン	ドンペリドン	制吐	水溶性	マクロゴール	50.0~57.0℃
ドンペリドン「日新」				酒石酸、ジブチルヒドロキシトルエン、マクロゴール	53.0~56.0℃
ダイアアップ	ジアゼパム	けいれん		マクロゴール	記載なし

坐薬について述べる上で、坐薬の基剤が重要となってきます。

坐薬は、油脂性の基剤でできているものと水溶性の基剤でできているものに分けられます。油脂性の基剤は主にハードファットが、水溶性の基剤にはマクロゴールが用いられています。

油脂性基剤の坐薬は肛門部からの挿入後、体温により融解し、主成分が直腸内に拡散し、吸収されていきます。一方で水溶性基剤の坐薬は、体温によって融解することではなく、腸内分泌液などの水分に溶解することによって、主成分が放出されます。

坐薬の中には冷所保存のものと同室温保存のものがありますが、それは各坐薬毎で溶融点が異なるためです。油脂性基剤の坐薬は体温で溶けるようになっているため冷所保存、水溶性基剤は室温保存となっています。

坐薬が2種類あるときの挿入順序

坐薬が2種類あるときには



水溶性基剤の坐薬

30分以上あけて

油脂性基剤の坐薬

の順番で使用するようにしましょう。

例えば、アンヒバ坐剤（油脂性基剤）とダイアアップ坐剤（水溶性基剤）が処方されている患者の場合、ダイアアップ坐剤を挿入し、30分以上経ってからアンヒバ坐剤を使うようにしましょう。

もし、アンヒバ坐剤を先に挿入してしまうと、ダイアアップ坐剤の主成分であるジアゼパムがアンヒバ坐剤の基剤に吸収され、吸収の遅延や阻害が生じる可能性があります。

参考文献

薬局 2023年3月増刊号 (Vol.74, No.4)

薬語図鑑 基礎薬学用語を現場で使える知識に訳してみました
各種添付文書、IF

薬局では、DI Newsで取り上げて欲しい内容を募集しております。
何かございましたら、院内のメールにて薬局水野までご連絡ください。